

第6章 商店街の活性化に関わる大学の役割

——佛教大学コミュニティキャンパスの試み——

関 谷 龍 子

1 大学と商店街

商店街活性化のため、商店街と様々な機関・団体との連携が行われている。その中のひとつに、大学がある。商店街に限らず、大学との提携は、これまで大学の持つ知的資源やシンクタンク機能の一方通行的な提供と活用が中心であったが、大学側でも社会との連携や地域貢献が重視されるようになり、連携の内容も双方向で多様なものになりつつある。

一般に、大学と商店街の連携によるメリットは、商店街側からは、若者層の来街、学生の新鮮な発想やアイデアの活用、学生という人的資源の活用、学生・教員の情報リテラシー、大学施設の提供、研究内容の提供・アドバイス、これらによる集客増・活性化などにあると考えられる。また、大学の側からは、学生教育の場、就業経験の場、起業の場、ボランティア活動の実践、人材育成、研究の場、学生や大学自身の情報発信の場、そして大学の資源を提供することによる種々の地域貢献、などが挙げられよう。

大学の街・京都市でも、「京都商業ビジョン2004」の中で、重点戦略のひとつとして「京都の特色を生かした創造的な商業の振興」を掲げ、大学都市という特色を活かし、当面取り組むべき事業として「大学との連携による地域に密着した商店街活性化の研究推進」「商店街と大学とのマッチング」を挙げている。また、財団法人大学コンソーシアム京都への委託事業として、各大学教員・学生による「京都市商業の未来像に関する調査研究報告」を併せて行っている¹⁾。

これまで試みられている、大学と商店街の連携の形態を大学の側から整理してみよ

1) 『おいでやす京の商い～京都市商業ビジョン2004～』2004年、京都市産業観光局商工部商業振興課。なお同書掲載の「京都市商業の未来像に関する調査研究報告書」の中で、佛教大学からも報告を行っている。

う。大学側の連携主体として、①教員個人（＋研究室・ゼミ）、②特定学部・機関、③大学全体のプロジェクト、などに分けることができる。また連携の中心目的としては、起業・店舗経営、教育・学生活動、調査・研究、中心市街地活性化、地域貢献など、及びそれらの組み合わせがあるであろう。①の例は、個々の教員レベルでの連携となるため、各地でかなり存在すると思われるが、連携が情報として把握しにくい上に、取り組みの継続性が確保されないという問題がある。従って、大学側からは②や③のような組織としての連携が望ましい形態であるといえよう。

①＋②の典型として関西学院大学・三田市本町センター街商店街の取り組みが知られている。商店街に「ほんまちラボ」を置き、教育・研究・学生による地域活動などを行っている²⁾。また③の例として、岐阜経済大学、佐賀大学、名古屋学院大学の取り組みを簡単に紹介しておく。

岐阜経済大学まちなか研究室「マイスター倶楽部」は、中心市街地活性化のため、大学、大垣駅前商店街、大垣市・大垣商工会議所が協定を結び、大学が運営主体となって駅前に研究室を設置、経済学部のゼミ学生が研究・実践活動を行っている³⁾。佐賀大学では、中心市街地再生のための地域貢献特別支援事業として、佐賀市・銀天通り商店街の協力でまちづくりサテライト「ゆつつら〜と館」を開設、大学教員による講座、学生のボランティア活動、市民の会によるプロジェクトなどの活動が行われている⁴⁾。

名古屋学院大学まちづくり推進プロジェクト「マイルポスト」は、瀬戸市・銀座通り商店街でまちづくり活動のため愛知県と瀬戸市から助成を受け、学生のカフェ・雑貨店「マイルポスト」の運営、学生オリジナル商品の開発、公開講座、教育などを行っている。学生は有志参加者をコアメンバーとし、非営利ビジネス、まちづくり活動等に従事、大学は全学組織で指導・監督に当たる。また、大学・商店街・商工会議所・TMO・行政等による連絡協議会も組織している。2002年からのまちづくり活動の結果、商店街空き店舗は半減し、通行量も増加しているという⁵⁾。

各地の取り組みに学ぶべき点は多々あるが、本稿では佛教大学が進めている「コミ

2) 片寄俊秀『商店街は学びのキャンパス』2002年、関西学院大学出版会

3) 岐阜経済大学まちなか研究室、<http://www.gifu-keizai.ac.jp/~meister/framepage1.html>、及び鈴木誠『大学と地域のまちづくり宣言』2004年、自治体研究社

4) 佐賀大学地域創成型学生参画教育モデル開発事業、http://net.pd.saga-u.ac.jp/sousei/proguram_1.html

5) 名古屋学院大学まちづくり推進プロジェクト、<http://www.ngu.jp/milepost/>

ユニティキャンパス」の活動を紹介しながら、商店街活性化と大学の役割について考えてみたい。

2 「コミュニティキャンパス」の理念

2004年4月、佛教大学「コミュニティキャンパス」が発足した。特定の学部のための機関ではなく、大学全体で利用する組織という位置付けであり、また具体的な場を指す呼称でもある。直訳すると「地域の中にある大学のキャンパス」であるが、校地や分校舎、あるいは運動場などの単なる学外施設ではない。大学キャンパスは本来、ある一定の囲まれた所にあり、学生が登校して勉学やキャンパスライフをおくるが、そこは閉じられた空間となっている。しかし、学生や教員も含めて、地域や社会の中で学び研究する必要の認識から出発したのが「コミュニティキャンパス」である。学びの場を大学外の地域社会の中に求め、その地域全体をキャンパス、教育・活動・研究・連携の場として考える。また地域の人々や資源から現実の社会を学ぶ。「地域で学ぶ、地域に学ぶ」という理念の下に誕生したのが「コミュニティキャンパス」である。

この組織の発足には、同時に行われた大学全体の学部・学科再編と密接な関わりを持っている。その理念や意義を正しく把握するため、「コミュニティキャンパス設置に関する企画書」の一部を掲載しておこう。

大学における教育の在り方は、今後一層社会に対し開かれたものになっていくことが予想される。平成16年度に開設される社会学部公共政策学科は、①公共性を地域や住民の暮らしの視点から再構築、②地域や「現場」に貢献する教育と研究、③公共サービスを担う人材の養成、④「現場」で学ぶ、地域の中で学ぶ教育の実践、の4つを取り組み課題に掲げている。

こうした課題の総合的な学習は、大学の中で学問の到達点を系統的に学習することと、きわめて個性的な特徴に彩られ、時々刻々と移り変わる地域社会の中で息づく実態に関わりながら体感することの統一によって初めて展開することが出来る。つまり地域社会の中で学習する場の確保こそが、目指す教育・研究活動の展開を実現するのである。その教育の特色は、

第一にフィールドワークやインターンシップなど「現場」や地域の中で学ぶことを重視する。抽象論に終わることなく、将来地域の中で、公共政策を担う人材とし

て働くためには、具体的個別的な地域の特色の理解こそが求められるからである。

第二に、こうしたプログラムにおいて一時的に点として地域と接するのではなく、地域の人々とともに学ぶことを重視する。それは地域が学問的な関心の対象である以上に将来の生活の場、仕事の場として地域を尊重するためである。

第三に、学んだ成果を、地域や「現場」に還元する活動を重視する。地域の人々から信頼され、地域の中で求められる大学を目指すための不断の条件整備を丁寧に展開するためである。

こうした公共政策学科の特色を実現していくため、大学の教育は、(1) 地域や「現場」との共働研究を重視し、(2) 地域の中での共働研究を追求することを最重要視する。そのために公共政策学科の開設に伴って、「地域で学ぶ、現場で学ぶ」ためのコミュニティキャンパスの開設を並行して進めることが必要である⁶⁾。

当初は新設の社会学部公共政策学科の理念や方針と重ね合わせて設置の企画が進められたが、その点を除いても、コミュニティキャンパス理念が明確に示されている。

「コミュニティキャンパス」は異なった性格を持つ多様な地域の中で学生が活動することを目標に掲げている。その地域とは、京都市上京区の北野商店街周辺の「コミュニティキャンパス北野」、京都府北桑田郡美山町（現・南丹市）「コミュニティキャンパス美山」である。美山町は茅葺屋根の集落で有名であり、あわせて集落の活性化活動やまちづくり活動でもよく知られている地域である。農村部の美山町と都市部の北野商店街という2地域でひとまず発足することとなった⁷⁾。

2004年2月には発足に先駆けてキャンパスを置いた美山町役場との間に包括的な連携協定を締結した。協定の中身は、人材育成、地域活性化を含めて、地域のために、あるいは大学の教育のために、お互いが連携をするということを謳ったものである。同年11月に北野商店街振興組合と、美山町と同内容の連携協定を結んだ。この2ヶ所の地域と連携協定を結ぶことで学生の受け入れ、地域の活動、大学との十分な連携を図ることが可能となった。また、2005年2月には美山に「美山荘」、2005年10月には北野に「ゆいまーる」と、それぞれ大学の拠点施設をオープンさせた。以下、本稿では「コミュニティキャンパス北野」についてとりあげることにする。

6) 浜岡政好「コミュニティキャンパス設置に関する企画書」2003年8月

7) 前掲「コミュニティキャンパス設置に関する企画書」では、この他にもニュータウン型を念頭に置いた第3のキャンパス開設が目指されている。

3 「コミュニティキャンパス北野」について

北野商店街と連携することになった経緯は、次のようなことである。佛教大学総合研究所「京都市における中心市街地の再生－中心市街地と商業組織の果たす機能と役割の社会学的分析－」研究班（遠州班）で、京都市上京区・北区周辺の商店街の実態調査研究を進めていたが、アンケート調査を実施したいくつかの商店街のひとつに北野商店街があった。この調査を契機に商店街理事らとの関わりが生まれ、大学の「コミュニティキャンパス」設置にあたって、いくつかの諸条件やお互いの利益が一致した結果、北野商店街と連携することになった。同商店街は、組合員数92軒（2006年）、もともと生鮮3品を中心としていた、近隣型の商店街である。現在でも生鮮品が中心で、飲食・買い回り品などは少ない。周囲は高齢化も進んでおり、来街者は中高年も多い。

佛教大学と北野商店街とは2km程の距離があり、大学に隣接するという近さではないが、歩ける距離であり、また自転車なら10～15分という比較的近くに立地している。連携は2003年夏から、佛教大学のインターンシップ受け入れという形で始まり、2名の学生が商店街振興組合事務所や組合員店舗で2週間の就業体験を行った。この時に2名の学生が作成した商店街マップが、現在も商店街内の舗道2ヶ所に商店街案内の電飾看板として掲示されているのは、特筆されるべきことである。また、2004年1月には、京都市主催の「京都市商業活性化シンポジウム」で同学生2名らの研究発表を行っている。

2004年4月、「コミュニティキャンパス北野」が発足、早速商店街・上京区社会福祉協議会・翔鸞小学校等との連絡会議を開くなど、本格的に活動がスタートした。以後、2004年11月に北野商店街振興組合と連携協定調印、1年後の2005年10月には、大学拠点施設「ゆいまーる」のオープンと展開してゆく。

なお、大学から自転車等でアクセスできるという利便性・近接性は、学生の自転車・バイク等駐輪問題にも直結する。同商店街への来街者は徒歩か自転車が圧倒的に多く、商店街を通る幹線道路の狭さから、舗道を自転車が走行することも多い。学生の不法駐輪は商店街の交通問題に直結することから、大学でも、商店街内に立地する京都こども文化会館（エンゼルハウス）や商店街の厚意で、駐輪スペースを確保している。地域の交通問題が学生自身の問題でもあり、調査課題でもある。

ところで、大学の連携協定は商店街に対して締結しているが、商店街との連携だけを想定しているわけではない。「コミュニティキャンパス」の理念からすれば、北野一帯の地域全体がキャンパスなのである。従って、商店街を核としながらも、周辺一

帯の地域社会・諸団体との連携や活動も不可欠である。徐々に学区（自治連合会）等との連携協力も推し進めているところである⁸⁾。

4 「コミュニティキャンパス北野」の活動内容

ここで、2004年度から2006年度（11月末現在）まで、コミュニティキャンパス北野で佛教大学が行ってきた諸活動について、まとめておくことにしたい。北野での主な活動を分類・整理すると、次のようになる。

- ①講義・授業に関連した利用・活動
- ②地域活動への参加
- ③起業セミナーと営業実習
- ④コミュニティペーパーの発行
- ⑤インターンシップの実施
- ⑥学生企画の採用・実施
- ⑦大学企画イベント
- ⑧地域向けの大学講座
- ⑨地域での調査・研究
- ⑩拠点施設の活用

①は、正課の授業の中で展開される、フィールドワーク実習、演習・ゼミ等の科目受講生が、商店街、北野周辺地域や拠点施設などの場で、現地での活動・調査などを行うものである。毎年、各授業で活用され、学生の成果も次第に蓄積されつつある。なお筆者のゼミでも2006年度、「ゆいまーる」を活用した、地域にゆかりの映画上映会や学生ミニライブ、商店街応援ホームページの立ち上げなどを試行している。

②は、「コミュニティキャンパス北野」でいち早く実現した活動であり、そのひとつが「きたの夏祭り」である。この夏祭りは例年7月下旬、商店街メンバーや周辺グループの方々がメイン会場に夜店を出し、ステージ上で出し物を行うもので、商店街最大のイベントであり、20回を越える回数を重ねている。2004年度からここに、佛教

8) 2005年度には仁和自治連合会主催の地域イベント「仁和まつり」に学生サークルが参加、2006年度は仁和自治連合会の協力により、大学のフィールドワーク実習授業の中で、地域の職人や古老の方々から聞き取りを行った。

大学生も参加する運びとなった。募集に応じ集まった学生は、単に祭当日だけその中に加わるのではなく、5月下旬以降、祭りの企画会議の段階から企画参加をする。自分の親かそれ以上の年代の方々と週に1回の程度のペースで集まり、学生ならではの出し物のアイデアや希望を提案しながら、討議を重ねて企画を決定していく。これが定着し、2006年で3回を重ねている。学生が自分たちで地域の中に入り、提案し考えて、それを行動に移していく糸口となったものである。

③は、仕事起こしをしたい学生向けのキャリア開発のための「起業セミナー」講座として企画がなされ、2005年5月に始まった。学生の中から、商店街で起業するメンバーが現れることが目標ではあるが、キャリア開発・能力開発といった学生のスキルアップも目的にしている。募集による学生メンバーが、週に1回就職講座のような形で外部専門家から起業のためのノウハウを実地に学び、研修を受けた。その研修の成果の実践、つまり営業実習という形で、北野拠点施設「ゆいまーる」を利用し、同年11月、カフェ経営を行った。2チームに分かれてそれぞれ1週間ずつ営業し、計2週間カフェを開いた。幸い地域の方にも多数来店して頂き、好評であった。店のコンセプトやメニュー、価格設定、あるいは簡単な周辺商店街のマーケティングを含めて、学生自身のチームが自主的に活動を展開した。2006年度からはキャリア系の発展科目として、単位化がはかられ、2006年8月、2週間にわたり営業が行われた。

④は、学生によるコミュニティペーパー『北野新聞』の発行である。北野の周辺地域で学生が自ら記事の取材をして新聞を発行するもので、2005年に創刊された。これは学生のキャリア開発のための試みの一環としての位置付けもある。カフェも新聞も、キャリア開発・学生の就職キャリアプログラム支援という面と、地域連携・地域活性化という様々な面を含んだ取り組みとなっている。新聞発行に関しては、起業セミナーと同じように現役新聞記者を講師に招いて毎回研修を受け、ノウハウを身につけた学生が、継続して取材・編集・発行を行っている。現在7号まで季刊で発行されている。

⑤は、前述のように先行して2003年度から実施されており、その都度数名の学生が参加している。

⑥については、コミュニティキャンパスの活動が軌道に乗ってきた2006年2月下旬、佛敎大学WSB研究会の提案により、佛大生と障害を持つ方々が、障害者等のセルフ・ヘルプ商品販売のショップを1週間にわたって開いた。また、2006年6月下旬から9日間、佛大生などの有志によるカフェ・サークルがカフェの営業を行った。例えばカフェ・サークルのコンセプトは「健康と環境、ロハスな生活」であり、健康に配慮し

た食材を使用・工夫したメニューづくりを行った。いずれも、明確な目的と意思を持った学生メンバーによる自主的な企画・活動である。

⑦としては、2004年11月の連携協定調印と同日、京都こども文化会館（エンゼルハウス）を会場に、シンポジウム「地域のつながりと商店街」を開催、基調講演及び商店街活性化の成功例として、東京都品川区・戸越銀座銀六商店街、富山市・富山中央通り商店街からゲストを招き、パネルディスカッションを行った。また、2007年1月以降にもシンポジウム開催を予定している。

⑧は、商店街等とどのようなニーズがあるか意見交換をした結果、地域の歴史を掘り下げる講座を中心に開催している。2004年度には、文学部史学科のゼミで学生が北野周辺をフィールドのテーマに選んで研究を行っていたため、その成果を地域向けに発表してもらった。また毎年度、「室町・戦国期の北野社とその周辺」「神仏分離と天神さん」等のテーマで、佛教大学教員が講師となり、地域向け講座を開いている。

⑨は、商店街の依頼に基づき、佛教大学教員が北野商店街活動のこれまでのあゆみを取材・研究している他、本研究班の研究もこの一端に加えられるであろうか。

⑩は、拠点施設「ゆいまーる」を活動の場として活用する試みである。佛教大学生のサークル等の展示のほか、同施設の使用がゆとりある期間に限り、地域の一般住民による展示等の受け入れを行っている。これまでに、佛教大学写真研究会作品展、日本画の個展、イラストレーターの作品展などを行っている。また、2006年3月と10月には、同じコミュニティキャンパスとして連携を行っている南丹市美山町の牛乳・卵・漬け物などの物産展を、美山支所・美山ふるさと株式会社の協力により開催、記録的な来客数と売り上げを挙げた。京都市内にアンテナショップを持っていた同町の「美山ブランド」としての商品性が広く都市住民に認知されていた結果であろう。

なお、これ以外の商店街を中心とした拠点施設活用については、次節で改めて述べることにする。

5 拠点施設「ゆいまーる」と商店街の取り組み

コミュニティキャンパス北野発足後、大学では商店街と共同で利用できる拠点施設開設への模索が続けていたが、適当な空き店舗物件が見あたらなかったため、当初は京都こども文化会館（エンゼルハウス）の好意で同施設のプレハブを借り、拠点代わりに使用していた。幸い2004年度中に物件が見つかり、京都商店連盟（京商連）創立60周年記念事業として、京都商店街振興組合連合会（京振連）空き店舗活用事業に商

店街が応募、補助が認められることとなった⁹⁾。当初の予定より半年ほど遅れて2005年10月に拠点施設が商店街のメインストリートにオープン、同年度末の2006年3月末までは、商店街の受けた補助を賃料に活用しながら、商店街と大学とが協同で利用していくこととなった。補助事業の終了により、2006年度からは大学単独の運用となったが、大学による使用を除いては、商店街による優先的な利用・活用を引き続きはかっている。

施設は延べ45㎡ほどのスペースで、多目的な利用を想定し、収納棚・長机・イスの他、厨房設備・事務室を整えた。商店街への委託により、常勤の管理者を1名置いている。2006年度の開館時間は9:30~18:30で、木曜の定休日を除き、6日間全日開館を行っている。また、施設の愛称を一般から公募、商店街・大学共同で選考を行った結果、沖縄方言で相互扶助という意味の「ゆいまーる」に決定した。

共同利用期間であった2005年度中、次のような商店街主催のイベント・企画が行われた。

オープン記念企画として、10月いっぱい「チンチン電車北野線ものがたり」講演・写真展・ビデオ上映などの関連企画、12月いっぱい「写真で見る明治・大正の京都～上京界限～」写真展、この間に「地域再発見講座」として、商店街・大学双方から講師を招いて地域ゆかりの映像や歴史に関する講演を実施した。2006年3月には、「子供たちが地域の歴史や伝統についてもっと知ってほしいという願い」¹⁰⁾から、子供たちが描いた絵を大学生が作った灯籠でライトアップするというイベント「北野のひかり」を企画、京都嵯峨芸術大学学生の協力のもと、京都こども文化会館広場を会場に、地元仁和小学校で、商店街での体験学習を行った児童らの描いた絵を、児童が参加してライトアップを行った。

2006年度は、4月~5月にかけて「写真で見る明治・大正・現在の京都」写真展、引き続き5月~6月にかけて商店街が発行する組合員向けミニコミ誌「ふれあいかわら版のあゆみ」展、7月いっぱい「地域ゆかりの江戸時代の絵師「長沢芦雪・北野今昔ものがたり」展を行った。また9月には買い廻りセールとして、プロの落語家・タレントを招き「北野寄席」を開催、商店街内の店でレシートを集めた応募者の中から抽選で招待した。同様のセールとして12月には、地元テレビ局に出演するタレントに

9) 次の記事も参照されたい。「がんばる商店街—京都商店連盟創立60周年記念関連事業 空き店舗活用事業・PART 2」『商店街振興情報』41号、2006年2月、京都商店街振興組合連合会

10) 『ふれあいかわら版』Vol.30、2006年春、北野商店街振興組合会員部

よる「北野トークショー」を行った。11月には、上京区内に拠点を置く歴史散策のNPO団体との共催で、「通りゃんせ一条・北野・大將軍 平安京を歩こう」ウォーキングツアーと講演を行った。

北野商店街では「ゆいまーる」オープン以前から、前理事長を中心にかつて商店街を走っていた京都市電北野線にまつわる企画や写真展を行ってきたが、それに加え北野や上京区内の古写真・古映像を収集・展示、「北野今昔ものがたり」というパンフレットも作成し、地域の歩みや歴史に向き合うことで地域への発信を行っている。「ゆいまーる」には時折、かつての市電関係者、映画関係者や、昔の写真を懐かしむ人々が訪れ、話題に花が咲く姿が見られ、地域の潜在的な人的資源をキャッチするきっかけともなっている。

「ゆいまーる」ではこの他、大学と商店街関連の打合せ等の場として随時使用している他、『北野新聞』を始め佛教大学パンフレット類、商店街の案内・チラシ、地域の催し物のチラシなどを置き、地域の結節・交流・情報発信の場としての役割も担っている。

表1・2は、オープン後1年を経過した時点で、半年ごとの来館者数を示したものである。通常の企画は展示・講演・上演が中心となるが、物販を行うと来館者数もかなり増加することがわかる。表1（前半期）の1日来館平均は61.6人だが、2回の物販を除くと46.6人という数字となる。また表1に比べ、表2（後半期）の来館者数は少なくなっているが、この期間内に物販による動員がなかったこと、前半期の、オープン当初の目新しさや話題性も考慮に入れる必要はあろう。参考までに、表1には時間帯別・曜日別来館者数の平均を示してあるが、表2期間の同じ数字の試算とは、傾向が大きく異なっており、検討が必要である¹¹⁾。

11) 表2の参考データ(試算)は、データ不備のため示していない。また、表2は2006年9月までの内容なので、本稿で言及している企画で掲載されていないものもあることを断っておく。

表6-1 「ゆいまーる」来館者数 2005.10～2006.3

期間	企画内容	開催 日数	来館 者数	1日平均 人 数
2005年				
10. 1～10.10	チンチン電車北野線ものがたり	9	450	50.0
10.11～10.31	チンチン電車北野線ものがたり	18	757	42.1
11. 1～11. 4	チンチン電車北野線ものがたり	3	81	27.0
11. 9～11.15	佛教大学起業セミナー「チューブ☆カフェ」	7	480	68.6
11.20～11.26	佛教大学起業セミナー・カフェ「和～ゆらり」	7	420	60.0
12. 2～12.14	写真で見る明治・大正の京都 明治時代	12	761	63.4
12.16～12.28	写真で見る明治・大正の京都 大正・昭和初期	12	897	74.8
2006年				
1. 6～1. 11	写真で見る明治・大正の京都	6	251	41.8
1. 14～1. 18	日本画個展	5	252	50.4
1. 20～1. 31	写真で見る明治・大正の京都	11	484	44.0
2. 1～2. 6	写真で見る明治・大正の京都	5	102	20.4
2. 7～2. 15	写真で見る明治・大正の京都北野界限見どころ	8	236	29.5
2. 19～2. 25	障害者セルフ・ヘルプ商品販売「COCO」	7	798	114.0
2. 27～3. 4	佛教大学写真研究会写真展	5	66	13.2
3. 5～3. 15	写真で見る明治・大正・現在の京都 北野界限見どころ	10	371	37.1
3. 18～3. 26	美山町旬の味物産展	9	2017	224.1
3. 27～3. 31	写真で見る明治・大正・現在の京都 北野界限見どころ	4	76	19.0
	計	138	8499	61.6

参考 1 時間帯別来館者数					
	平均人数	構成比 (%)	1 時間当り人数		
10～13時	21.6	35.9	7.2		
13～15時	18.0	30.0	9.0		
15～18時	20.5	34.1	6.8		
参考 2 曜日別来館者数（平均人、木曜休み）					
月	火	水	金	土	日
36.1	54.1	40.0	38.0	81.6	117.0

表 6 - 2 「ゆいまーる」来館者数 2006.4～2006.9

期間	企画内容	開催 日数	来館 者数	1日平均 人 数
2006年				
4. 1～5.17	写真で見る明治・大正・現在の京都 北野界限 名所・旧跡	41	1261	30.8
5.19～6.21	ふれあいかわら版のあゆみ／北野界限地図を見る	30	644	21.5
6.24～7. 2	佛教大学ほか有志・カフェ「どるつくす」	9	(不明)	
7. 7～7.31	長沢芦雪を学ぼう展／北野今昔ものがたり	21	502	23.9
8. 5～8.11	佛教大学起業セミナー・カフェ「夏凜」	7	223	31.9
8.12～8.13	チンチン電車ものがたり・懐かしいチンチン電 車放映	2	9	4.5
8.22～8.28	佛教大学起業セミナー・カフェ「柔」	7	274	39.1
9. 2～9.24	きたのマップ写真展	19	370	19.5
9.9のみ	北野寄席	1	54	—
9.25～9.30	きたのマップ写真展／ぐい飲み小皿等小品展	5	170	34.0
	計	141 (*1)	3507 (*2)	37.6 (*3)

(*1) 「北野寄席」は夜だけのイベントなので、合計日数に含めない

(*2) 不明を除き、「北野寄席」を加えた合計数

(*3) 来館者数不明の9日を除き、132/3507で計算

6 現状と課題

以上、コミュニティキャンパスの取り組みを紹介してきた。第4節で述べた活動内容を振り返ってみたい。①の教育活動は、商店街周辺で学生が活動することで、従来とは違う年齢層の来街者増加につながるが、一方調査・ヒアリングの重複やテーマの類似化、店舗・店主への迷惑などに配慮が必要である。また調査・研究結果の地域への還元をはかるため、今年度から年度末に地域向けの研究発表会を計画している。地域の方にも来場を頂き、発表と率直な意見の交換を繰り返すことで、学生のレベルアップに繋がっていくことが期待される。

②の地域参加は、直接イベントの活性化や盛り上げにつながり、学生も企画参加することで社会参加体験を得ることができる。一方、参加学生が年度ごとに入れ替わるため、企画の継続性や学生の経験の蓄積がはかりにくいという問題が生じている。

③起業実習や⑥学生企画による営業は、スペース活用による休憩や憩いの場づくり、様々な年齢層の来街者の増加につながるが¹²⁾、学生側の目標の明確化や活動内容の自

12) カフェ実習に関し、拙稿「商店街のあり方を考える～学生カフェの試みを例に～」『生衛ジャーナル』2006年7月号、財団法人全国生活衛生営業指導センター、でも見解を述べた。

己点検をきちんとはかることが課題となろう。

④のコミュニティペーパーは地域からの、また地域への情報発信、⑦大学企画・⑧地域向け講座・⑨調査研究は、大学の文化・学術活動による生涯学習・地域貢献、⑩のスペース活用も、商店街活性化につながる。今度、できるだけスペースを地域や市民に開放することで、大学の地域貢献をはかっていくことが求められるであろう。

このキャンパスに関わる学生は、自らが考え主体的・自主的に行動することで、社会や地域の仕組み、動かし方等について広く学んでもらうことが期待されている。その意味で、われわれの学生指導や育成という点でまだ不十分な面もあり、今後いかに主体的・自主的な活動を育てていけるかが課題である。

「コミュニティキャンパス」の組織は全学体制であるが、大学内部での認知度・理解度という面では不十分な点があり、関わる教職員もまだ一部に留まっている。今後いかに周知・理解をはかっていくかも課題の一つである。商店街側に対しても、今後大学との連携をどのように位置づけるか、どのように活用してもらうか、さらに周知や理解をはかっていく必要があるだろう。

冒頭に挙げた各大学の取り組みも、中心市街地活性化、まちづくり活動など地域貢献活動が重視されるようになってきている。今後のあり方としては、連携の核となる商店街は地域住民の生活を支える資源や装置である、という認識、商店街との連携こそが地域貢献活動である、という認識のもと、来街者や住民向けの活動を行っていくことが求められよう。

例えば、イベントを通したNPO・行政などとのネットワークの拡大、拠点施設を集会・展示など住民活動のスペースとして開放、拠点施設での子育て支援や高齢者サポートを目的とする活動の展開、医療・看護グループとの連携による健康相談活動、などが考えられる。一方で学生自身の主体的活動を援助・促進すると共に、住民向けの活動にも学生が積極的に関わっていくあり方が望まれる。

そして、何よりも受け入れをしていただいている商店街・地域の意向を尊重・連携しながら、今後の活動を進めてゆきたいと考える。

附記

本稿を成すに当たり、北野商店街振興組合関係者各位に、記述内容に関して情報提供を頂いた。謝意を申し上げたい。また本稿は、筆者が佛教大学「コミュニティキャンパス北野」担当という立場に依拠して記述したものであるが、その見解や評価などは、筆者個人の責に帰するものであることを断っておく。